

# ネイチャー高知

No21 2003年 4月26日発行

## 高知県自然観察指導員連絡会総会

日時 2003年4月26日(日曜日) 午後1時30分から

場所 牧野富太郎記念館 アトリエ実習室

### 2002年活動報告

#### 【研修会の開催】

2002年 2月17日 高知県の野生生物の現状

場所 高知市五台山 牧野富太郎記念館

講師 岡村 収

#### 【自然観察会の開催】

2002年 1月 5日 春の七草と冬の田んぼ観察会

場所 高知市久礼野 講師 細川公子 参加者 18名

2月30日 スミレと早春の花観察会

場所 鏡村鏡ダム周辺 講師 細川公子 参加者

4月21日 皿ヶ峰の植物観察会

場所 高知市皿ヶ峰 講師 稲垣典年 参加者

6月15日 浦戸湾の干潟と磯の生物観察会

場所 高知市横浜衣ヶ島 講師 三本健二 参加者6名

10月12日 秋の七草と棚田の植物観察会

場所 高知市久礼野 講師 細川公子

10月12日 ムササビ観察会 (森の回廊四国を作る会と共催)

場所 伊野町椋本神社 講師 中西安男 参加者10名

11月10日 蛇紋岩地の植物観察会

場所 高知市蓮台 講師 細川公子 参加者13名

#### 【機関誌・ニュースレターの発行】

2002年 2月 1日「ネイチャー高知No20発行」

3月 2日 ニュースレターNo14発行

6月 2日 No15発行

9月29日 No16発行

機関誌「ネイチャー高知」については年2回の発行を目標にしてきましたが、原稿の集まりが悪く、1回しか発行できませんでした。

## 2003年事業計画

### 【研修会の開催】

2003年4月26日

演題「化石が語る環境の変遷」

講師 三本健二 (自然観察指導員連絡会世話人 高知化石研究会会長)

### 【自然観察会の開催】

2003年度も自然観察会を中心にした活動に取り組んでいきます。また、これまで続けてきた観察会以外に、宿泊を伴う観察会&親睦会などにも取り組みます。

2003年 1月 春の七草と冬の田んぼの観察会  
3月 スミレと早春の花観察会  
4月 皿ヶ峰春の植物観察会  
6月 鏡川河口の貝類観察会  
8月 皿ヶ峰早秋の花観察会  
9月 陸の貝類観察会  
10月 秋の七草と棚田の植物観察会  
10月 皿ヶ峰秋の植物観察会  
10月 ムササビ観察会  
11月 蛇紋岩地の植物観察会

### 【機関誌・ニュースレターの発行・広報活動】

会員からの記事や情報の提供を受けて、機関誌「ネイチャー高知」を年2回の発行します。

また、会の活動をタイムリーに会員に知らせるためのニュースレターを発行するとともに、高知新聞の「伝言板」などを利用して、観察会に多くの方が参加出来るよう、広く呼びかけます。

☆☆☆☆☆ 事務局からのお願い ☆☆☆☆☆

より充実した楽しい機関誌にするため、会員の皆様からの投稿をお待ちしています。あまり堅苦しい内容にならないよう、身の回りの自然をテーマにしたエッセーなども大歓迎です。

次回は、7月を予定していますので、ふるって投稿してください。

## 身近な植物と共に生きていくには

稲垣 典年（高知県立牧野植物園 連絡会幹事）

先日、岡山県北部に植物観察の機会を得ることができました。四国山地を超え高松自動車道に入ると、咲き始めたクロバイと共にオンツツジの朱い花が咲いていました。瀬戸内海の島々から中国地方に渡る山並みではコバノミツバツツジの紫の花が一面に咲き、また中国自動車道に入ってからにはタムシバの白い花が驚くほどの美しさでした。今までになく広い範囲に咲いているのです。これはどうも松枯れによって日が入るようになったことが大きな要因のようでした。牧野植物園のある五台山でも同じようにオンツツジが目立ってきています。

昭和30年代までは、燃料といえば薪や炭を使っていました。長い年月、里山は20～30年のサイクルで木が切られ、裸になった里山ではツツジがどの植物よりも早く成長し花を咲かせていました。それぞれの地域にそれぞれのツツジがごく普通に見られたのです。

ところが、20年も経つとこれらのツツジはサクラ、ハゼノキ、シイノキ、クスノキなどの高木に追い越されて衰弱化してきます。がまた、燃料として切られるのです。この繰り返しによって多くのツツジが生きてこられたのです。

昭和30年代後半から、燃料は石油やプロパンガス、電気に変わり、木を切ることが少なくなりました。当然、スギやヒノキの植林が進んだことが一番の原因でしょうが、木を切らなくなったのが、ツツジが少なくなった大きな原因の一つです。木を切らなくなって30年余りたった今は、大きく育った山桜の花がどこでも見られるようになりました。このため、オンツツジやフジツツジ、モチツツジといった里山のツツジは少なくなってしまうのです。しかしこの山桜も、このまま10年も放っておけばシイノキやクスノキに取って変わられ、間い森林となっていくことでしょう。私の見た瀬戸内海では松枯れによってツツジが復活していたのです。

日本には70種類ものツツジがあります。その中で本県には海岸地から四国山地まで、20種類ほどのツツジが生息しています。しかしこのままでは自然のツツジは見られなくなるのでは、と心配しています。

高知市筆山の皿ヶ峰では3月になると毎年のように山火事があり、草原が保たれていました。昨年は今までになく大きな山火事があり、広い範囲でネザサなどが焼け、地面に日が入るようになりました。おかげでと言っては変ですが、固有種(その地域にしかない種)のホソバノヒメトラノオが大発生しました。他にもスミレ類、ササバラン、ダイサギソウ、キキョウ、オミナエシ、カキラン、ミズトンボ、サワギキョウ、ノハナショウブ、ミズオトギリといった本県では貴重な草原植物、湿地植物の復活が期待できます。

これら草原植物は、木が生え森林となると生きていけません。草原が維持されなくてはならないのです。ここ皿ヶ峰の草原植物は、何度となく繰り返される山火事によって保たれているのです。

そういえば、九州の九重高原や阿蘇高原などでは、山火事が発生したら大変ということで、前もって火入れをし山火事を防いできたのですが、今ではそこに生えるキスミレ、エヒメアヤメ、オキナグサ、サクラソウ、ツクシシオガマ、イチリンソウ、リュウキンカ、ワダソウなどの草原植物保護のため野焼きを行っているのです。



## 四国山地の「緑の回廊」について

坂本 彰

「森の回廊四国」を作る会は、四国の森林とそこに住む野生生物を守り、人間と野生生物との共存、人間と森林との共生を目指すために、四国に「森の回廊」をつくることを提案して、活動をしてきました。

四国における国有林は、森林全体に占める割合が高いだけでなく、原生林など優れた自然環境が保たれている森林が多くあります。また、四国山地の脊梁部に連続している森林も国有林が中心です。さらに、全国的に「緑の回廊」として設定されているのも国有林を中心とした取組です。このことから、四国に森の回廊を造るにあたっては、国有林を抜きにして実現不可能であり、まず国有林に設定することを提案してきました。

森の回廊四国を作る会が作成した提言書では、国有林に次の役割を果たすことを期待しています。

### [提言書の内容]

国有林は、四国島内の最大の森林所有者であり、かつ行政機関でもあることから、「森の回廊」づくりにあたっては、以下のような役割を果たすことが期待されます。

1. 「森の回廊」づくりを国有林の地域別の森林計画及び施業計画において、何らかの形で位置づけること。
2. 所有する森林において「森の回廊」づくりに取り組むこと。
  - a. 「森の回廊」の核心となる生物生息地を保全すること。
  - b. 「森の回廊」の回廊部分となる樹林帯を区画・整備・保全すること。特に、所有する森林の境界に沿って樹林帯を整備すること。
  - c. 「森の回廊」の周辺林分において、生物との共生を考慮に入れた施業を積極的に取り入れること。
3. 「森の回廊」づくりにあたっては、関係自治体との連携を図ること。
4. 「森の回廊」づくりに協力する民間団体・個人等に対して支援を行うこと
5. 形成された「森の回廊」をフィールドとした各種行事を行い、生物と人間の関係についての一般の理解を深めること。
6. 四国4県の知事による「森の回廊サミット」(仮称)にオブザーバーとして参加すること。
7. 四国4県と協力して「森の回廊・四国」整備計画(仮称)に積極的に取り組むこと。

このような状況の中で、四国森林管理局においては2002年6月に緑の回廊設定委員会(座長 埴田宏森林総合研究所四国支所長)を発足させ、検討を進めてきました。その結果委員会では、石鎚山系において、石鎚山生態系保護林から白髪山材木遺伝資源保存林に至る延長約70kmを、剣山系において、小檜祖山から剣山に至る東西の線と高ノ瀬から魚梁瀬に至る南北の線を組み合わせたT字型の延長約58kmを「緑の回廊」として設定する案を取りまとめ、12月26日に高知森林管理局に提案しました。回廊に設定される予定の森林面積は、関係保護林を含めて、石鎚山系で12,274ha、剣山系で10,569haになっています。

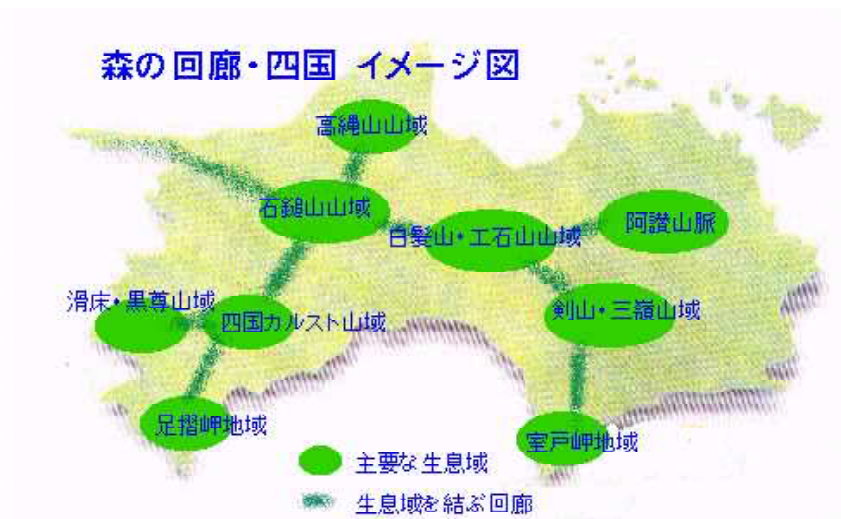
私も委員の一人として審議に参加してきました。今回の設定で、四国山地の自然豊かな森林を良好な状態で維持していくための第一歩がスタートしたこになり、このことは大いに評価できますが、いくつかの点で課題を残しました。

最も大きな課題は、保護林の設定が十分でないことで、このことは特に剣山系の回廊で顕著

です。今回設定する剣山地区の面積は10,569haですが、その内、回廊部分が10,142haなのに対し、関係保護林として指定されている森林は426haで、わずか4%にすぎません。緑の回廊については「保護林と保護林の間をつなぐ国有林野であり、野生生物の自由な移動の場として保護することにより、野生生物の生息・生育地の拡大と相互交流を図り、広範囲で効果的な森林生態系全体を保護することを目的としています。」(国有林における緑の回廊について:四国森林管理局資料)とあるように、生息地の生息地を結ぶものであり、まず野生生物の生息・生育の場所が保護林として確保されていることが必要で、今回の回廊の指定はこの点が不十分です。このことに関しては、今回の回廊の設定では解決せず、今後モニタリングの結果等を踏まえ、希少性、学術性などの保護の必要性に応じて保護林の拡充を検討する事になりました。

その他、民有林との連携をどう進めていくかといったことや、剣山系では国有林でありながら飛び地になるため回廊に含まれなかった地域(烏帽子・矢筈山地域や高城山・雲早山周辺など)を将来どのようにして回廊に続けていくかなども今後の課題です。

このような課題を残しながらも、前述のとおり、四国山地に野生生物の保全を目的にした回廊が設定されることは意義のあることであり、モニタリング等今後の活動を通じて拡充を図るよう取り組んでいく事が必要だと考えています。



(森の回廊四国を作る会が提案している回廊のイメージ図)

## 観察会活動報告

雪の下の七草探し 2003年1月5日 春の七草と冬の田んぼ観察会  
.....今年の春の七草は雪をかき分けて探しました.....

おとそ気分も覚めやらぬ1月5日に「春の七草と冬の田んぼの植物観察会」を開催しました。春の七草の行事は、旧暦の1月7日の行事ですが、南国高知は太陽暦の1月7日ごろに七草が揃うということで、暦どおりの七草の観察会を開催しています。

ところが、今年は久礼野周辺の田んぼは一面の冬景色。雪をかき分けてセリやナズナ、ハハコグサ（御行）、ハコベ（はこべら）コオニタビラコ（仏の座）、を探しました。

百人一首に歌われた「君がため春の野に出でて若菜つむわがころもでに雪は降りつつ」がぴったりのような観察会でしたが、講師の細川さんの指導のもと、雪の下から次々と七草を見つけ、感心しながら採取しました。

## 雨にも負けない観察会 「皿ヶ峰の植物観察会」

4月12日に開催した「皿ヶ峰の植物観察会」は前日の天気予報が当たらずに、雨の中の観察会になりました。

前日の天気予報では、12日の午前6時以降の降雨確率は20%でしたが、前線が南下するのが遅れて、天気が回復したのは観察会が終了した後の12時頃になってしまいました。

それでも、「小雨決行」の言葉どおり、雨合羽に長靴（登山靴にスパッツ）といった「完全装備」の参加者があり、予定どおり開催しました。

あいにくの雨で、予定していた参加者全員は揃いませんでしたが10名で雨の皿ヶ峰周辺の植物を観察しました。

雨のため、観察できた花の数は少なかったですが、雨の春の草原をたっぷり楽しみました。

皿ヶ峰周辺の植物の保全については、今回講師をしていただきました稲垣さんから「身近な植物と共に生きて行くには」と題してという投稿があり、掲載してあります。是非ご覧ください。

また、皿ヶ峰の植物観察会はキキョウの咲く晩夏と、秋の花の頃にも開催することになっています。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

No21

事務局 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰方

TEL&FAX 088-850-0102

E-MAIL akira@baobab.or.jp